

## 田園俳人松本椿年の生涯と作品(二)

——明治大正期から終戦頃までのライフイベントと作品——

宮 川 充 司\*

### 生涯発達心理学の視点から捉えた 松本椿年の生涯と年譜試作版

俳人松本椿年(本名松本傳次郎)は、明治二十年(一八八七)七月に静岡県駿東郡中嶋村(現在の静岡県駿東郡小山町中島)の旧家に生まれ、昭和六十一年(一九八六)二月に生涯を閉じた地方俳人である。十歳の頃から、俳句の宗匠でもあった父親から俳号と俳句の手ほどきを受け、その父親の没後から最晩年満九十八歳で生涯を閉じる臨終ぎりぎりの所まで、ほぼ一世に亘る日本社会の激動期を、農村の中で生活に密着した俳句とともに生きた俳人である。この俳人について、前稿(宮川、二〇一六)で年譜の試作版を作成した。この年譜は、俳人本人あるいは他の研究者が何も残していないところから、まさに零からの試みであった。その手法として、単純に俳人としての年譜を作成することのみを目的とするのではなく、それを構成するためにも、もっと大きな俳人の生涯という枠組で、

俳人の個人史を作成し、その中から後に俳人としての年譜を作成できるような方向での資料収集とライフイベント(出来事)の分類整理をするということが、基本的なアプローチの姿勢である。これは、松本椿年という俳人個人の研究だけでなく、生涯発達心理学における個人史の作成方法の研究としても、寄与するところが少なくないのでないかと考えている。

この俳人については、既に没後三十年を経て、多くの資料が失われ、現存している資料からどれほど、その生涯のライフイベントを拾い上げ、年譜ないし個人史を再構成できるかはまだ不確定要素を抱えているが、大筋で十分それが可能であることは前稿で記述した通りである。とりわけ、この俳人の生涯にわたる個人史の構成について、こうした目的のため、俳句作品そのものが利用できるかどうかという点については、この俳人は特に適合していると考えられる。俳人の中には、想像した光景や言葉そのものの修辞技法のみで虚構の作品を作っている例もないとはいえないが、この俳人の場合、まさに生活に密着した状況下で、それぞれの句が作られていっ

たからである。この俳人の場合、農村に働く農夫として、農作業の傍ら、その生活の中で発見した現象や感動を俳句に表現していったというのがまさにこの俳人の俳風である。また、日常的な農作業によつて研ぎ澄まされていった自然観察眼が、この俳人の真骨頂であり、部屋の中で想像や俳句の作法で季節の句を詠んでいくタイプの俳人とは一線を画している。また、風雅な自然の情景の描写だけでなく、まさに生活に密着した状況の中で様々な出来事を俳句に織り込んでいった。その俳句作品の特徴から、特にこの俳人のライフイベントに関わる出来事を俳句と共に抽出していったのが、前稿の大きな作業であった。暫定版とした理由は、ライフイベントの年月についても、まだ推定に依らざるをえないので、後に発見する資料から追加や修正といった書き換えが必要なものも十分存在していると考えなければならぬ。事実、現時点で二部修正・追加すべきできごとを見つけている。これらについては、後述するが、原稿末の資料一に、現時点での修正を加えた年譜（個人史）を示す。

まずは、前稿で試みたこの俳人の年譜から、俳人としての生涯発達の段階を、ここでまず区分してみると、大きく次の五つの時期に区分することができるのではないだろうか。本稿では、第一期から第二期までの時期を中心に、前稿で試作した年譜の修正あるいは追加の事項に焦点を当てて、補足してみることにする。

#### 松本椿年の生涯発達の区分

- 一、誕生から俳句の習作期（明治二十年から大正末期頃）
- 二、俳人としての出発と戦前の俳句誌への第一次投句期（昭和初期から昭和十六年頃まで）
- 三、俳句誌への投句休止期（昭和十七年頃から昭和二十七年頃）

- 四、俳句誌への第二次投句期『大富士』『みづうみ』投句期（昭和二十八年頃から昭和五十八年頃）
- 五、最晩年終焉期（昭和五十九年頃から昭和六十一年二月）

#### 俳句の習作期（明治三十年頃から大正末期頃）

明治三十年（一八九七）十歳、尋常小学校最終学年四年ないし翌年三月尋常小学校卒業、高等小学校進学の際、父親で地方の俳句の宗匠であった松本勘太郎（俳号吉野庵禾拾）から、俳句の手解きと椿年という雅号を与えられ、作句を作り始める。この時期から大正十一年十二月その俳句の最初の師匠でもあった父親が没し、その後から本格的に俳句を作り始めた時期までとする。この時期の作品は少なく、作句時期の特定が難しいが、前稿で報告したように、未公開の草稿本句集の『つはき句集』（椿句集）に含まれている。この『つはき句集』は、収録の句から昭和三十年代半ばから昭和四十年代の初頭にかけて、とりわけ俳句誌に投句していない句を中心に、椿年自身の記憶を頼りに書き留めておいたものと推定している句集である。

この俳人には、高年齢期になってから出版された二つの句集がある。一冊は昭和四十五年（一九七〇）四月八十一歳で処女出版した句集『句集 老稚』であり、もう一冊は昭和五十七年（一九八二）四月九十四歳の時に出版した『第二句集 限界』である。句集の出版という点については晩成の俳人である。とりわけ、『句集 老稚』は十歳の頃から句作を初めて、その出版までの約七十年間に渡る人生の節々のことが織り込まれているといわれる。また、その『句集 老稚』の草稿本ではないかと思われるのが、『つはき句集』

〔椿句集〕という手書きの和綴本である。ただし、この句集に、二百七十八句が書かれているが、その『句集 老稚』に掲載されているものは百六十八句である。『句集 老稚』には合計七百六十一句が掲載されているので、約二二%を占めているに過ぎない。『つはき句集』は『句集 老稚』の直接の草稿板というより、その一歩前の段階（昭和三十年前半と推定）に自作の句を書き留めたものであるのではないかと推定している。この句集についてはまだ未確定部分が多いので、詳細な分析は後にまとめるものとするが、この『つはき句集』は、俳句誌に投句していない時期の作品が、多く書き留められている。中には、作風とモチーフから、十代の若き日に作句したものではないかと推定される句も含まれており、極めて貴重な資料といえる。

この『つはき句集』の句を、季語により季節を分類すると、「新年」三十四句、「春」六十九句、「夏」六十五句、「秋」八十九句、「冬」二十一句と、特に冬の句が少なすぎる。ちなみに『句集 老稚』に掲載されている句を、季節別に分類すると、「新年」六十八句、「春」百十五句、「夏」二百十七句、「秋」百八十二句、「冬」百七十九句と特に冬の句が少ないとはいえない。

作風と句の情景から、俳句を作り始めた十代の頃と推定できる句が、『つはき句集』（椿句集）に数句含まれているのではないということを前稿で記載した。

まず、次の春の二句は、俳句を作り始めた十歳の頃の句ではないかと推定される句である。

花○の画紙ふりふりて蝶を追ふ

〔『つはき句集』八頁〕

遠足のリツク虎杖翁草

〔『つはき句集』一五頁〕

最初の句は、図画に花丸をもらって、喜び勇んで帰る児童の風景を描写した句で、いかにも小学生の作りそうな楽しい句である。第二句も小学校の春の遠足の句である。また、明治三十年ころの農村の児童らしく、山の遠足の折、リツクに山草山菜を沢山持ち帰った。その中に、食用ともなる春の野草虎杖もあり、それを季語としている。なお、この句は昭和四十五年（一九七〇）四月、椿年八十一歳で処女出版をした『句集 老稚』にそのまま収録されているが（五四頁）、第一句は未収録である。

次に、第一句と似た春の児童の句がある。

ふらここの二つ並ひて競いけり

〔『つはき句集』一三頁〕

『つはき句集』では、「ふらここ」は「ふららこ」と記されているが、この句は『句集 老稚』五三頁に「鞞鞞の二つ並びて競ひけり」とブランコを意味する「鞞鞞しゅうばん」という語に置き換えられているので、ブランコの古語「ふらここ」の誤写と推定できる。この句の二人並んでの相手が誰かという点、幼友達か三歳違いの次兄啓作ではないかと推定できる。「競いけり」と切れ字で結んでいるので、思い出の光景を詠んだ句と考える方が自然である。ただし、この作句時期の特定は、もう少し個人史の出来事の精査が必要である。同じく次兄啓作との関係を示す、十歳の頃の作と推定できる新年の句がある。

書初や兄に勝りし筆力

〔『つはき句集』三頁〕

椿年には、二人の兄がいるが、長兄半治は十歳年長であるので、兄弟でもライバルとはなり得ない年齢差があるので、この兄は次兄の啓作であろう。

十代の頃の作品と推定されるものに、前稿でも触れた明治三十五年（一九〇二）三月の高等小学校を卒業した折の句と推定した二句がある。

卒業の日机より出しかけら墨 （『つはき句集』一三頁）

卒業やあれし先祖の墓に立つ （『つはき句集』一三頁）

その他、十代から二十歳の頃の句と推定してもよい句が、『つはき句集』に含まれているが、作句時期の特定は困難なものが少なくない。正月のかるたの句が三句ある。そのうち、第一句のかるた会句は、「蚕とり眼して」という蚕を選別する時のようなという表現は、養蚕の経験を踏まえた表現なので、十代よりも少し後の作句の可能性も否定できないが、他の二句は子ども時代のかるた遊びの句のように推定することが可能である。

かるた会蚕とり眼してかまえ （『つはき句集』五頁）

取り合ふてかるた一枚はじきあげ （『つはき句集』五頁）

膝元をとられてくやしかるたかな （『つはき句集』六頁）

同じように十代から二十歳初頭頃の句ではないかと推定できる、

別の句がある。

移り来て端居なしまぬ山かたち （『つはき句集』二三頁）

「移り来て」の意味は、転居してという意味であろうが、椿年は生涯に亘り、生まれた集落からほとんど離れていない。季語は、縁側に座って涼むという意味の「端居」なので季節は夏。

明治三十二年（一八九九）六月十一歳高等小学校二年の時に、同じ集落内にある山崎伊三郎家の養子となり、明治四十三年（一九一〇）十月に養子縁組を解消し松本家に復縁、同時に北郷村の山崎利三郎次女すみを正式に婚姻入籍している。養子縁組解消は、養家に実子の男子が生まれ無事に育っていたからであろう。その翌月に長女（第一子）を誕生入籍しているので、生まれてくる子どもの入籍が絡んだ时期的にぎりぎりの復姓入籍であったものと思われる。当時の風習かと思われるが、婚姻を結んでも直ちに入籍をせず、第一子の出産が確実となつてから正式入籍ということは、珍しくなかったようである。おそらく、実際の婚姻は、その前年の明治四十二年（一九〇九）頃であろう。生家の松本家から提供を受けた椿年とその子どもたちの戸籍資料を注意深く見てみると、この妻すみの入籍頃、椿年は生家あるいは養家のある集落から離れ、駿東郡六合村生土三十六番地の住所となつている。新居は、椿年の勤務先富士紡績小山工場に近い場所あるいは社宅に構えていたことになる。また、次兄小野啓作の家にも近い住所である。ただ、大正二年七月に生まれた次女サクの出生地は椿年の生家のある集落の住所中島十八番地の住所となつているので、次女が生まれた頃には椿年の生家のある集落に戻つていたことになる。

さて、当該の「移り来て」の作句時期であるが、椿年の転居という事項を推定すると、最初の可能性は十一歳の時の生家のある同じ集落内の山崎伊三郎家の養子となった時期が考えられるが、養子縁組は六月なので季節は合致している。十一歳の句としてはできすぎていて句のように思われる。また、その養家は、生家から徒歩で数分の同一集落にあるので、山の形がなじまないという表現が当てはまるかどうかはともかく、家から見える山のかたちが違うので落ち着かないという気持ちは当てはまるかもしれない。前述のように、妻すみと婚姻をした二十二〜二十三歳、明治四十二〜四十三年（一九〇九〜一九一〇年）頃、一度だけ生まれ育った集落を離れた時期があったので、その転居して間もない頃の時期の句という可能性も高いかもしれない。

大正六年（一九一七）九月に分家をして、生家に近い場所に新居を構えるが、生家に近い場所なので、住居から見える山のかたちがなじまないという表現が当てはまらないのではないだろう。

大正十一年十二月父親が行年八十二歳で没した。その父親の没後、句会に参加する方法で俳句を作り始めた時期。前稿で触れたように、大正十二年秋（十月頃）に開かれた富望ぬし追悼句会で、椿年の句は天位となっている。服部畊石選『富望ぬし追悼句集』（父親の没年の翌年の新盆の句、推定年代大正十二年秋の追悼句集）がある。この追悼句集の富望（庵）主とは、誰なのかは不明である。父親とほぼ同じ時期に亡くなった俳人か、あるいは亡くなった父親の別称なのか、不明である。

供物たた霊棚の灯の揺らくのみ

大正十二年のお盆は、父松本勘太郎の新盆であった。この地方のお盆は、新暦の七月地藏盆（七月二十三日・二十四日）に行われる。その父親の新盆を詠んだ句が、この句である。なお、この年の九月一日は、関東大震災が起きた年である。また、この地方は静岡県の神奈川県との県境にある地域にあるので、大震災でそれなりの被害があったことも推定されるので、あるいは震災から人心が少しだけ一段落した十月頃と考えるのが合理的であろう。

椿年自身が書いている『句集 老稚』のあとがきによると、この頃から椿年は俳句に打ち込むようになっていき、務めていた富士紡績小山工場の中に、俳句部を作り、著名な宗匠の評をとったり、『箒』という小誌を発刊したりしていたという。

#### 俳人としての出発と戦前の俳句誌への第一次投句期 （昭和初期から昭和十六年頃まで）

大正末か昭和初頭か正確な年代は現時点では未確定であるが、この頃同じ中島の集落出身で、東京の俳人加納野梅門下の坂本緑村が帰住してきた。おそらく、椿年が務めていた富士紡績小山工場に勤めることとなり、その緑村の勧めで、加納野梅が主宰していた『鬼栗毛』という俳句誌に投句指導を受けたと、これも『句集 老稚』のあとがきに書かれているが、その『鬼栗毛』を所蔵している図書館は見つけていない。したがって、椿年が最初に投句指導を受けたとされる俳句誌『鬼栗毛』への投句状況は、全く確認することができない。

昭和三年以前の椿年の俳句作品を特定するのは、現時点では多くの困難を伴う。前稿で触れたことであるが、椿年が生家から分家し

て起こした松本分家には椿年の遺品として残されている八冊の和綴本手書き句集がある。そのうちの二冊は既に触れた『つきき句集』『富望ぬし追悼句集』である。他の六冊の句集はいずれも句会の記録としての句会集である。そのうち五冊は大正末期から昭和初期に開かれた句会の句集、残り一冊は戦後の句会の記録『三井園宗匠古稀祝賀句集喜雨の巻』である。大正末期から昭和初期に開催された句会の句集はいずれも年月日を特定する手がかりが何も記載されていないので、翻刻作業は漸く終えたものの、正確な年代推定ができていない。ただ、そのうちの一冊『美鶏堂門下陽障園花人雅号披露句集』は、その中に含まれている手がかりから、昭和三年頃の秋に開かれた句会ではないかと推定できる限られた句集である。その句集は、俳人としては昭和七年頃までの記録しか確認できない坂本緑村と共に句会に参加している限られた資料である。「初汐」「女郎花」「鴨」「花火」の四つの季語が題として示されている。それぞれ題に各二句出席した各俳人が作句している。椿年の句は、各題の冒頭に記されている。

初汐 初汐やひたひた迫る庭の先

初汐や見えつかくれつ沖の岩

女郎花 野生とは見ゆぬ姿や女郎花

女郎花書生の部屋に生けてあり

鴨 子供去って鴨なく栗の梢かな

鴨なくや夕日は赤きちぎれ雲

花火 花火果て帰るさ道の闇深し

揚花火仰ぎて溝のはまりけり

この句会で、最高得点者は椿年であり、「十印」「三光」句位に女郎花の句がそれぞれ選ばれている。「十印」には、緑村の句も選ばれている。

釣り花火一ツ残して星の如し 緑村

加納野梅の主宰する俳句誌として、昭和四年一月から『新草』という俳句誌が発刊され、その昭和四年一月発行の創刊号から昭和七年八月号までの秀句が、加納野梅の選によって書籍『新草俳句集』として昭和七年十二月に刊行され、「著者寄贈本」として国立国会図書館に寄贈され、現在国立国会図書館デジタルライブラリーとして公開されている。

その中に、作句時期が推定できる椿年の次の句がある。

行幸に就き天覧糸の飾玉を作る

ともすれば汗ばめる手を洗いつつ (『新草俳句集』一〇八頁)

この句の作句時期は、『富士紡績株式会社五十年史』<sup>(2)</sup>「年表」昭和五年六月二日の項に、次の関連記述がある。まさに昭和天皇静岡行幸という出来事の直前の作句と推定できるのではないだろうか。椿

年は当時、富士紡績小工場に勤めており、まさにその天覧となる飾玉を作り、黒田侍従はそれを受け取りに工場を来訪したということであろう。

天皇陛下静岡県へ行幸ノ御砌、侍従子爵黒田長敬氏ヲ小工場ニ御差遣ノ光栄ヲ賜フ。

正岡子規が創刊した俳句誌『ホトトギス』の最初の暖簾分けの俳句誌として、『曲水』は渡邊水巴が大正六年に創刊し主宰していた。その『曲水』同人・選者で、綴り方教育の教育者としても著名だった古見一夫（俳号豆人）が、椿年の母校でもあった小山町立成美尋常高等小学校の校長として、着任してきた。教育者としての古見一夫は、椿年の母校に校長として在職中の昭和七年（一九三二）に『形象原理に立つ綴り方教育の実際』という本を出版する程、綴り方教育に熱心な教育者であった。その古見一夫のもう一つの側面は、俳人古見豆人として『曲水』の作家であり、教育者であるため、また影響力の大きい俳句の指導者という側面があった。事実、『曲水』の多くの作家を、静岡県東部伊東・小山の尋常高等小学校の訓導、後に校長として異動していくが、その先方で育てている。

この古見豆人の母校の校長としての着任ということは、椿年あるいはその周辺の俳人たちにとって、非常に大きなできごとであった。この事柄については、前稿で詳しく書いた。早速、富士紡績小工場俳句部の椿年は、坂本緑村・早間踏青子らとともに、着任間もない豆人に、俳句部の指導者としての依頼を行った。その過程で、豆人を主宰とする「あゆみ句會」が創設された。この会は、富士紡績小工場俳句部の有力メンバーに湯山素鷗や湯山逸素といっ

た地域の俳人を加えた句会で、その多くが『曲水』、次に豆人が主宰した俳句誌『大富士』の作家として育っていく。この「あゆみ句會」の同人で豆人の推薦で最初に『曲水』に投句を開始したのが、椿年である。これらのことは前稿で、詳しく記述した。

『曲水』は、日本近代文学館が第一巻第六号からかなりの巻号を体系的に所蔵している。戦前分については、欠巻があるものもの、もっとも体系的に所蔵されている。欠巻のごく一部については、国立国会図書館がデジタルコレクションのデータベースとして閲覧に供している巻号で補完できた巻号もある。日本の古本屋サイトで検索し、戦前発行分で欠巻になっている巻号の一部について入手補完することができたものもある。前稿で報告したように、『曲水』への椿年の投句は、第十四巻第十二号（昭和四年九月号）に掲載された二句に始まり、第十九巻第十一号（昭和九年十一月号）を最後に投句が絶えている。ただし、『曲水』第十九巻第十二号（昭和九年十二月号）から第二十巻第二号（昭和十二年二月号）は日本近代文学館と国立国会図書館ともに欠号となっているので、それらの号に椿年の句が掲載されていた可能性も一方で否定できない。いずれにせよ、第二十巻第三号（昭和十二年三月号）以降は、明らかに椿年の句は『曲水』に投句掲載されていない。

一方、昭和四年に古見豆人を主宰者としたあゆみ句会の昭和四年と五年の二年分を書籍としてまとめたと推定できる『あゆみ句帖』（大富士吟社）という書籍があったことは、後にふれる古見豆人が昭和九年（一九三四）に編集刊行した書籍『大富士句帖 第一輯』の巻末広告にある。しかし、「日本の古本屋」といった古書の検索サイトを使用してもその書籍を探し出すことはできなかった。また、それを所蔵する図書館も見つけていない。恐らくこれらは個人

で所蔵している人がいるかどうかの状況ではないかと考えられる。戦前の『大富士』は、国会図書館の蔵書リストに含まれていない。国立国会図書館が所蔵しているのは、もっぱら戦後刊行分である。

戦前の『大富士』については、各三年分の掲載句の中から古見豆人が選し『大富士句帖』第一輯〜第五輯までが刊行されていた。また、「日本の古本屋」の検索サイトから、第一輯〜第四輯までを入手することができた。書籍『大富士句帖第一輯』は、『大富士』第一巻第一号（昭和六年一月号）〜第三巻第十二号（昭和八年十二月号）からの選句刊行、『大富士句帖第二輯』は『大富士』第四巻第一号（昭和九年一月号）〜第六巻第十二号（昭和十一年十二月号）、『大富士句帖第三輯』は『大富士』第七巻第一号（昭和十二年一月号）〜第九巻第十二号（昭和十四年十二月号）、『大富士句帖第四輯』は『大富士』第十巻第一号（昭和十五年一月号）〜第十二巻第十二号（昭和十七年十二月号）からの選句刊行であった。これらの『大富士句帖』に掲載されている椿年の句は、第一輯には二十五句、第二輯には十三句、第三輯には十一句、第四輯には「戦死せる甥の遺骨を迎えて（二句）」と題する南風の二句が掲載されて、そこで椿年の句は絶えている。

その後、いずれの図書館でも所蔵されていないと半ば諦めかけていた『大富士』の戦前刊行分が、一部の欠巻欠号があるものの、静岡県立中央図書館ただ一館に所蔵されていることが判明した。

『大富士』第四巻第九号（昭和九年九月号）以降の戦前刊行分が所蔵されている。欠号は、第一巻第一号（昭和六年一月号）から第四巻第八号（昭和九年八月号）、第四巻第十号（昭和九年十月号）、第八巻第七号（昭和十三年七月号）、同巻第八号（同年八月号）、同巻第十号（同年十月号）から第九巻第二号（昭和十四年二月号）、

第十巻第十一号（昭和十年十一月号）、第十一巻第十号（昭和十六年十月号）、第十二巻第一号（昭和十七年一月号）、同巻第三号（同年三月号）が戦前の『大富士』について、欠号となっている。

これらの蔵書について、椿年の掲載句について閲覧調査を実施し、資料を追加した。その結果、戦前の『大富士』掲載句は、第四巻第九号（昭和九年九月号）から、第八巻第四号（昭和十三年四月号）の豆人が小山第一国民学校の校長職を辞し、東京世田谷に転居する昭和十三年四月頃までほぼ毎号への投句が掲載され、その後はまばらになっていく（ただし欠号も多い）が、ついに第十一巻第四号（昭和十六年四月号）の「父八十六歳生前墓碑を建つ（二句）」と「十二月のれんげ」の句の投句を最後に投句を休止したことが判明した。『大富士』の戦前刊行分の確認によって、前稿の修正が一部必要となってきた。その修正追加分をとりわけ戦前昭和期を中心に以下に記述する。

まず、前稿では、昭和八年（一九三三）の出来事で、「俳人椿年にとつて最も輝かしい年は、退職した翌年昭和八年（一九三三）である。この年の正月古見豆人と雪中富士登山を行った。

この時の句が『曲水』第十八巻第四号（昭和八年四月号三四〜三五頁）「曲水句帖」の竿頭を飾った」と記載した。これは、『大富士句帖第一輯』（『大富士』第一巻第一号〜第三巻第十二号「新年の部」六頁）に載っている古見豆人の句から豆人師と同行していると推定したものであった。

富士山二合目にて床次課長に言葉をかけらる

年賀 吹雪中に富士は日當る御慶かな 豆人

椿年の雪中富士登山五句の中の一句「吹雪く中に御慶かはして消えにけり」とモチーフがよく似ている句であるからである。また、現在でも富士山の冬登山というのは大変な危険を伴うことなので、富士山に強い関心を持っている豆人師に求められての富士登山だったのではないかという推定を行った。しかし、この推定が誤っているのではないかと考え方を示す資料が、『大富士』第九巻第七号（昭和十四年七月号）に掲載されている「富士に憑かれて」という豆人の小エッセイである。その中に、「私は富士へは、御殿場口から一回、須走口から一回、吉田口から一回、三回登つてゐるがその季節はこれまでの勉強や勤務の関係上休暇になつての八月ばかりであった（四五頁）」という記述がある。特に昭和八年正月豆人師は、学校長の要職にあつたので、敢えて無謀ともいえる冬の富士登山をするとは考えにくい。とすると、同じ時期の豆人師の句は、「富士山二合目にて」という前書が付いている句は、富士山頂（十合目）を指す雪中富士登山ではなく、別の時に富士山の麓に近い二合目（御殿場口ならば太郎坊）付近に、冬スキーに出かけていた時の句ではないかという考え方も成り立つのではないだろうか。ただし、椿年の雪中富士登山の句が『曲水第十八巻第四号』の竿頭を飾つたのは、『曲水』投句時期のもっとも輝かしい出来事であるので、椿年に花を持たせる意味であえて記さないでいたという可能性も皆無ではないかもしれない。椿年の場合、前年の秋に長年勤めた富士紡績小手工場を退職しているので、その開放感からの正月登山であつたのかもしれない。

なお、当時の『大富士』の各号末には、「各地句座」という欄があり、駿河小山のあゆみ句會の記録がほぼ毎号載せられているが、その中の第四巻第十一号（昭和九年十一月号）に、その年の九月二

十五日に湯山素鷗宅二階で開かれたあゆみ句會の記録を、椿年が記している（一九頁）が、この時の句會が石田佛子が初参加であつたことが記されている。

『大富士』の戦前発行分の巻号への椿年の掲載句を閲覧していったところ、昭和十年以降の年譜の記載事項に、微妙な変更追加が必要なが判明した。まず、『大富士』第五巻第三号（昭和十年三月号）に次の句があつた。

義父逝く（三句）

凍土に放り出したる飾りかな

松とりし穴に立てけり門位牌

霜に立てて折れし線香や笹子鳴く

第一句は、季語は「飾り」で、正月の注連縄を差す。正月あるいは年末に突然亡くなり、葬儀となつた衝撃を表現している句である。椿年の場合、義父という関係表記が当てはまる人は二人いたと考えられる。一人は、妻すみの実父小山町北郷の山崎利三郎、もう一人は椿年が十一歳から二十三歳まで養子となつていた小山町中島の山崎伊三郎である。おそらくそれぞれの家に没年月を問ひ合わせれば、いずれの方であるかは判明すると思われるが、現時点では未確定である。ここで、先の年譜で訂正が必要なのは、第一句は『句集 老稚』の二〇〜二二頁に「近親者事故死 七句」という強い前書がついているものの第一句である。この七句は、この句集が刊行された年から三年前、昭和四十二年年末の近親者の交通事故死の際

の句と考えられていた。また、第二句は、『老稚』の当該箇所の第三句の句の類似句である。老稚の当該句「門松の跡に立てけり門位牌（二〇頁）」は恐らく、この句を改作したものと考えるべきであろう。つまり、『句集 老稚』の「近親者事故死 七句」は一つの不辛な出来事でなく、二つの出来事、つまり椿年にとって強い衝撃を受けた二人の死に関わる句を一つにまとめたのではないかと考えられる。

椿年の喪の句に「門位牌」という語が度々登場するが、これは宗教民俗学でいう「モンパイ（門牌）」のことで、人が亡くなるとその家の入り口に、亡くなった人の戒名を書いた紙位牌を、杭に乗せた白木の屋根型の龕（箱）に納めて初七日まで門口に立てるものや、奈良県に見られた紙札を門口に貼り付けるといった喪の習俗である（竹折、一九七二、奥野、一九九七）。

次に、『大富士句帖 第二輯』六四頁に掲載の次の句である。この第二輯は『大富士』第四巻第一号〜第六巻第十二号からの選句出版であったため、年譜の上で死亡の年代が近い次姉くら（昭和十一年三月）の逝去の際の句と考えていたが、その前年の『大富士第五巻第四号』（昭和十年四月号）に掲載されているので、この句は次姉くらの逝去の句ではなく、前年の義父の死に関わる句と考えるべきだろう。

寒さ 納棺 がつくりと頭垂れたる寒さかな

（『大富士句帖 第二輯』大富士第五巻第四号）

なお、この昭和十年七月に、椿年の集落近くの農業貯水池で、不幸な事故が起きている。豆人が校長を勤める小山第一尋常高等小学

校の若い教師が、夏休みに入ったばかりの七月二十四日その農業貯水池で溺死するという出来事である。恐らく町中で深い悲しみと同情を誘った事件であったと思われる。その第一句その若い教師の捜索における母親の深い悲しみを詠み込んだ名句である。情に深いいかにも椿年らしい句である。

大島源悟郎君溺死（三句）

水底の子を呼ぶ母や雲の峰

夏の草句はしく焚火煙けり

暮れんずる水に火映える河鹿かな

（『大富士第五巻第十号（昭和十年十月号）』四頁）

昭和十二年（一九三七）になると、次第に椿年の周辺にも戦争の影響が押し寄せてきた。『大富士』に掲載された椿年の句から世情の変化を拾ってみる。

月涼し号外の鈴しんしんと

（『大富士第七巻第九号』（昭和十二年九月号）七頁）

季語は「月涼し」（夏の月）であるので、七月頃の号外を詠んだものとすると、この年七月七日に起きた盧溝橋事件の時のことではないだろうか。

応召兵社前報告

涼しさや幹へと響く万々歳

『大富士第七卷第十号』（昭和十二年十月号）一九頁）

夏の季語「涼しさ」の句であるので、八月の頃の世情を詠んだものとするとして、この詞書き「応召兵」の中に、生家松本本家の嗣子紋地が含まれているあるいは紋地自身をさしている可能性も高い。その年の八月頃に甥の紋地に召集令状が届いたのではないだろうか。

秋雨を擧手にはじきて征きにけり

『大富士第八卷第一号』（昭和十三年一月号）五頁）

出征兵の勇ましい姿を描いているという反面、「征きにけり」という表現でどことなく寂しさが漂う句である。おそらく、この出征兵は甥の紋地をさしていると考えるべきであろう。出征は前年の十月の頃のことであろう。

続いて、昭和十三年一月頃の句で入営した甥を慰問した時の句が『大富士第八卷第三号』に掲載されている。ちなみに、松本本家には、この時椿年が持参したと推定できる一月十二日付の挨拶状の下書きが残されている。

甥の入営に追添ふ（二句）

昂れる頬つやつやと冬日さす

初風や擧手あちこちに光り合ふ

『大富士第八卷第三号』（昭和十三年三月号）一三頁）

なお、その後の追加すべき出来事として、『大富士第八卷第六号』（昭和十三年六月号 七月一日発行）の巻末「各地句座」の欄三〇頁に、四月二日に開かれた古見豆人師の送別句会の様子が記載されており、その折の椿年の句である。焼け焦げた桜というのは前年一月に小山町生土富士紡績裏門付近であった大火の後に咲いている桜を詠んだものではないだろうか。

豆人選

半こげしまま咲満ちし櫻かな

『大富士第八卷第六号』（昭和十三年六月号）三〇頁）

ちなみに、その前年一月の大火について詠んだのではないかと推定される椿年の二句が、『大富士第七卷第三号』に掲載されている。

藪深く火車うつりるる冬芽かな

焼跡に夕づく雪の積りけり

『大富士第七卷第三号』（昭和十二年三月号）五頁）

『大富士』の各号末に「各地句座」の欄があり、この頃まで駿河小山あゆみ句会が毎月豆人師を中心に開かれていた様子が毎号に記載されきた。しかし、この豆人師の送別句会を境に、あゆみ句会の記載がまばらとなりついには途絶えている。

豆人師が小山を去って、翌年昭和十四年二月、豆人師が小山を再び訪れ、句会を開いている。『大富士第九卷第三号』（昭和十四年三月号）四六〜四七頁に掲載の豆人師の『句會五連夜』の記事に、

「同年二月四日に鶴沼（藤澤）和泉博士邸、二月五日東京赤坂の月明クラブ、二月六日三島森永食品工場事務室、二月七日沼津翠雨居、二月八日夜駿河小山素鷗居と五日連続句会を開催」とある。ただし、その句会の参加者に椿年の名がない。翌日豆人師は「中島に椿年居を訪ねて、搾乳の様子を見、とろろ汁の馳走になり」（四七頁）と記載している。恐らく、句作の継続と『大富士』への継続投句を促したものと推定できる。

その他、椿年に孫を詠んだ句は戦前にはないと考えていたが、『大富士第九巻第十一号』（昭和十四年十一月号）に孫のことを詠んだ句がある。松本家分家の家系資料からは、その年の一月に生まれた初孫の光弘を詠んだものと推定される二句である。

孫の尿膝にぬくとし今朝の秋

秋の灯や己がおならに怖ゆる兒

（『大富士第九巻第十一号』（昭和十四年十一月号）五頁）

次に、前稿（宮川、二〇一六）で甥の戦死と『大富士』への投句休止に関わる記述を次の様に書いた。

「戦前の俳句誌に投句した最期になるのは、昭和十五年（一九四〇）で、その前年昭和十四年（一九三九）十二月に松本本家の甥紋地が戦死、翌年その遺骨と軍刀が帰還する。その時の南風の句。季語から考えると、昭和十五年五月頃の句と推定できる。

戦死せる甥の遺骨を迎えて（二句）

南風 南風や血曇り濃ゆき日本刀

抱く遺骨脈うてるかに南風をゆく

この句を最期に、俳誌『大富士』への投句休止。  
（『大富士句帖 第四輯』）

この昭和十五年は京大俳句事件が起こった年で、俳句の世界にも思想弾圧と国家統制が厳しくなっていく年で、俳壇や俳句誌も大きく変貌していく年であった（森、二〇一三）。

椿年が再び、『大富士』に復帰するのは十三年後の昭和二十八年（一九五三）後の十一月のこととなった。（前稿五三頁）

しかし、この記述は一部に訂正が必要である。まず、当該二句の正確な掲載巻号は、『大富士』第十巻第八号（昭和十五年八月号）七頁に掲載されている句である。また、同誌同頁には、この二句以外に三句が掲載されている。

本家の甥祖父一人を残して戦死、部隊長より來信

寒燈や一字一句が血の匂ひ

豆撒けば祭壇の寫眞またたける

だきし遺骨脈うてるかに南風をゆく

遺品

南風や血曇濃ゆき日本刀

近隣の人々と公報を祖父に告ぐ

涙凍えてゆがめし貌や空つ風

なお、前稿ではこの句を最後に、戦前の『大富士』への投句休止と記したが、実際の戦前最後の投句は、翌年四月の第十一巻第四号（昭和十六年四月号）九頁への投稿であった。句の前書で父とあるが、これは椿年には義兄（長姉まさの配偶者で、松本本家の婿養子）の松本紋次郎のことで、この年齢は数えの年齢であると推定でききる。

父八十六歳生前墓碑を建つ（二句）

冬風の入日ににじめり朱入文字

冬風や己が石碑にぬかづける

十二月のれんげ咲きけり霜のち

椿年が『大富士』への投句を休止した翌年、『大富士第十二巻第二号』（昭和十七年二月号）「大富士風土記（續）」欄の「駿河小山支部」のところで、古見豆人師は次のように嘆いている。

然るに私が同地の小學校長を辞し去つて、「大富士」発行所を、相模の鵜沼に移し、更に東京へ進出する様になつて、私の足も漸次小山へ遠ざかるにつれ、諸君の熱も冷めて來た憾みなきを

得ない。特に閑江は教職に、素鷗は菓子製造に忙しく、椿年は牛飼の手が離されぬとあつて句作を怠りがちに、今は虹人、沐人、志朗の三人が句作精進をつづけてゐる。それでも三十人の同人がゐるので支部風土記も書いて欲しかつたが何と言つても書いて來ない。己むを得ずここに思い出の記といつたようなものを執筆することとなつて了つた。（豆人記）

（『大富士第十二巻第二号』一五頁）

古見豆人師の文中、閑江とあるのは佐野閑江のことで、正業は豆人が務めていた小山第一国民学校の教師、素鷗は湯山素歐のことで正業は菓子製造の会社経営であつた。また、「椿年は牛飼に手が離されぬ」とあるのは、この頃椿年は乳牛を飼育しており、『大富士第九巻三号』（昭和十四年三月号）三九頁に掲載のある次の句を踏まえての記述である。

搾乳の手を離されず御慶受く

なお、静岡県立中央図書館の書誌情報によると、『大富士』は第二次世界大戦の戦火が激しくなつていく第十四巻第六号（昭和十九年六月号）から第十五巻第十二号（昭和二十年十二月号）までは、俳句雑誌『三日月』『みどり』『微光』と統合され「松籟」という雑誌として、大富士書房から出版された。その第十四巻第六号から第十五巻第六号（昭和二十年六月号）までは、第十四巻第十一号（昭和十九年十一月号）を欠号とする他、同館で所蔵しているが、これらには椿年の投句は見られない。

戦後第十六巻第一号（昭和二十一年一月号）から、『大富士』と

して独立復刊しているが、第十九卷第九号（昭和二十四年九月号）までは、国立国会図書館の憲政資料室に所蔵されているマイクロフィッシュ資料として閲覧可能である。これは、出版物は日本の戦後六年間の統治機関であったGHQの検閲が入っていたためである。第十六卷第一号から第十八卷第四号（昭和二十三年四月号）までは、DELETEDという表記と塗りつぶされた生々しい検閲の跡が残されている。その間、前田岳人・石田佛子・佐野閑江といった椿年と交流の深い俳人は戦前・戦時中から継続して投句掲載されているが、椿年の投句はない。前稿では、『大富士』に投句復帰するのは、第二十四卷第二号（昭和二十九年二月号）と記述した。しかし、正確にはこれは誤りで、GHQの検閲が緩やかになった第十八卷第五号（昭和二十三年五月号）から第十九卷第十号（昭和二十四年十月号）まで、まばらであるが、椿年の俳句誌投句休止期とした時期に、一時投句の復帰掲載があるのを発見した。ただし、これはすぐに途絶えており、戦火を経て大きく変貌したこの雑誌に違和感を感じたためではないかと考えられる。なお、次の三句のうち二句は冬の遊ぶ童の句で、作句時期を戦後間もない時期のものとする、第三句は内孫の京子と奈美江姉妹の遊ぶ光景を詠んでいる可能性が高い。

初雀雪の茶垣にゐて鳴ける

霜やけの手と手めんこをぶつけ合ふ

山茶花やままごとの一人すねてゐて

〔大富士第十九卷第六号〕（昭和二十四年六月号）九頁

## 謝辞

本研究は、松本椿年翁のご子孫である松本喜美子・松本典彦・時男の各氏による貴重な資料の閲覧許可とご証言が研究の基盤データとなっている。同じく、内孫にあたる山崎京子・井上奈美江様からは貴重なご教示をいただいた。国立国会図書館・日本近代文学館・静岡県立中央図書館の貴重な蔵書を利用していただいた。また、一部の資料の翻刻に際しては、椋山女学園大学国際コミュニケーション学部の高橋亮先生・加藤益幹先生・太田有多子先生のご助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

## 注

〔1〕『美鷄堂門下陽障園花人雅号披露句集』の句会の年月は句集に何も記載がないが、その中に手がかりが含まれている。同郷の俳人で加納野梅門下坂本緑村が同席している数少ない句会である。この俳人との戦前の接点は、大正末期から昭和八年頃に限られるであろうこの句会には四つの題があり、秋の「初汐」「女郎花」、冬の「鴨」、夏の「火花」である。その火花の句の中に、別の俳人の句で「聖年の空に轟く火花かな 井寿」「民草の玉東拝むや揚げ火花 禾竜」の二句がある。この年代で「聖年」とあるので、キリストの聖年ではなく、昭和天皇の大嘗祭（即位礼）の年昭和三年十一月頃の句会と推定するのが自然ではないだろうか。

〔2〕 渋沢社史データベース 富士紡績㈱「富士紡績株式会社五十年史」（一九四七年十二月刊行）による。

[http://shashi.shibusawa.or.jp/details\\_nenpyo.php?sid=2490&query=&class=&id=all&page=13](http://shashi.shibusawa.or.jp/details_nenpyo.php?sid=2490&query=&class=&id=all&page=13)（二〇一六年九月一日アクセス）

〔3〕 静岡県駿東郡小山町のおやま一〇〇年のサイトによる。  
<http://www.fuji-oyama.jp/oyama100/100nenpyou.html>（二〇一六年九月一日アクセス）

引用文献

- 石田仏子 昭和五十七年（一九八二） 仏子句集 花筏 私家版  
 奥野義雄 一九九七 まじない習俗の文化史 岩田書店  
 古見豆人 昭和六年（一九三二） 大富士 曲水、第十六卷第六号、六〇～六一頁  
 古見一夫 昭和七年（一九三二） 形象原理に立つ綴り方教育の実際 厚生閣出版  
 古見一夫（豆人）編 昭和九年（一九三四） 大富士句帖 第一輯 啓仁館（昭和九年六月発行『大富士』第一巻第一号～第三巻第十二号 昭和六年一月～昭和八年十二月号の掲載句から選句掲載）  
 古見一夫（豆人）編 昭和十二年（一九三七） 大富士句帖 第二輯 大富士吟社（昭和十二年十一月発行『大富士』第四巻第一号～第六巻第十二号 昭和九年一月～昭和十一年十二月号の掲載句から選句掲載）  
 古見豆人 昭和十四年（一九三九） 句會五連夜 大富士、第九卷第三号、四六～四七頁  
 古見豆人 昭和十四年（一九三九） 富士に憑かれて 大富士、第九卷第七号、四四～四五頁  
 古見一夫（豆人）編 昭和十五年（一九四〇） 大富士句帖 第三輯 大富士吟社（昭和十五年八月発行『大富士』第七巻第一号～第九巻第十二号 昭和十二年一月～昭和十四年十二月号の掲載句から選句掲載）  
 古見豆人 昭和十七年（一九四二） 大富士風土記（續） 駿河小山支部 大富士第十二巻第二号（昭和十七年二月号）、四四～四五頁  
 古見一夫（豆人）編 昭和十九年（一九四四） 大富士句帖 第四輯 大富士吟社（昭和十九年十二月発行『大富士』第十巻第一号～第十二巻第十二号 昭和十五年一月～昭和十七年十二月号の掲載句から選句掲載）
- 加納野梅編 昭和七年（一九三二） 新草俳句集 野梅吟社（新昭和七年十二月発行『新草』創刊号～昭和七年八月号より選句掲載）  
 前田弥一（岳人） 昭和四十年（一九六五） 自選 岳人句集 私家版  
 松本椿年 昭和九年（一九三四） 各地句座 駿河小山あゆみ句會 大富士、第四巻第十一号、一九頁  
 松本傳次郎（椿年） 昭和四十五年（一九七〇） 句集 老稚 私家版  
 松本傳次郎（椿年） 昭和五十七年（一九八二） 第二句集 限界 私家版  
 宮川充司 二〇〇〇 生涯発達と個人発達 宮川充司・大野久・大野木 裕明編 子どもの発達と学校 ナカニシヤ出版 一～一六頁  
 宮川充司 二〇一六 田園俳人松本椿年の生涯と作品―生涯発達心理学の観点から略年譜の試作― 椋山女学園大学研究論集 第四十七号 人文科学篇 四三～五九頁  
 竹折直吉 昭和四七年（一九七二） 日本の民俗二二 静岡 第一法規出版
- 未公刊資料  
 一、畹石選『富望ぬし追悼句集』（推定年代大正十二年秋の追悼句集、選者畹石は、指頭堂という雅印から、大正から昭和初期にかけて俳人で篆刻家の服部畹石と判断できる）（椿年遺品）  
 二、松本椿年『つばき句集』（昭和三十年代中頃までの自選句集と推定二百八十句が季節別に選句されているが、冬の句が少ないのが特徴の自筆遺品）  
 三、禾晶選『美鷄堂門下陽障園花人雅号披露句集』（推定で昭和三年秋に開かれた句會集）
- \* 教育学部 子ども発達学科

資料一 松本椿年（傳次郎）年譜（改訂第一版）

年月	年齢	出来事
明治二十年 (1887) 七月	誕生	静岡県駿東郡中嶋村の旧家の三男として誕生（七月七日） 父親松本勘太郎（俳号吉野庵禾拾）四十五歳、母きく四十一歳 義兄紋次郎（俳号竹因）二十六歳、長姉まさ二十歳、 次姉くら十二歳、長兄半治十歳、次兄啓作三歳
明治二十四年 (1891) 十月	四歳	義兄松本紋次郎と長姉まさと長女りん生まれるが、翌明治 二十五年（1892）一月早世
明治二十七年 (1894) 四月	六歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校入学
明治三十一年 (1898) 三月	十歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常小学校卒業 父親より俳号椿年を与えられ、この頃から句作 静岡県駿東郡六合村立成美高等小学校進学 妹あき早世
明治三十二年 (1899) 六月	十一歳	同村の山崎伊三郎の養子となる
明治三十四年 (1901) 一月	十三歳	妹イワ（勘太郎四女）誕生 長兄半治室伏まつと婚姻届
明治三十五年 (1902) 三月	十四歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校卒業
明治三十九年 (1906) 十月	十九歳	義兄松本紋次郎まさ夫婦、砂山のぶ（明治三十八年二月生 一歳）を養女とする
明治四十年 (1907)	二十歳	富士紡績小山工場勤務
明治四十一年 (1908) 二月	二十一歳	次兄啓作小野家に養子
明治四十三年 (1910) 十月	二十三歳	六合村生土に転居 山崎伊三郎との養子縁組解消、松本家に復縁 駿東郡北郷村山崎利三郎の次女すみと婚姻入籍 長女イマ誕生

大正二年 (1913) 七月 十一月	二十六歳	生家に近い小山町中島十八番地に転居 次女サク誕生 妹イワ没（行年十五歳）
大正五年 (1916) 七月	二十八歳	長兄半治妻まつ没（行年四十四歳）三男三女をなすがいず れも早世
大正六年 (1917) 九月 十一月	二十九歳	母きく没（行年七十一歳 老衰） 分家（小山町中島六十二番地に居住） 長兄半治岩田やすと再婚 三女志磨誕生 長兄半治四男紋地（嗣子）誕生
大正九年 (1920) 二月	三十二歳	長兄半治妻やす没（行年二十八歳） 長兄半治りょうと再婚
大正十年 (1921) 五月	三十三歳	四女みどり誕生
大正十一年 (1922) 二月 四月 十二月	三十四歳 三十五歳	五女愛子誕生 長姉まさ没（行年五十七歳） 父勘太郎没（行年八十二歳）
大正十二年 (1923) 十月	三十六歳	富望主追悼句会 天位（選者服部聃石） 供物たた霊棚の灯の揺らくのみ この頃から本格的に俳句を作り始める 富士紡績小山工場 内に俳句部創部『舊』創刊 この頃、加納野梅門下坂本緑村掃村 加納野梅坂本緑村宅 訪問（昭和三年以前） 加納野梅主宰『鬼栗毛』投句
大正十四年 (1925) 三月	三十七歳	長兄半治妻りょう没
大正十五年 (1926) 六月	三十八歳	長兄半治没（行年五十歳）
昭和二年 (1927) 二月	三十九歳	末子（六女）喜美子誕生
昭和四年 (1929) 四月 六月	四十一歳	加納野梅月刊俳誌『新草』創刊 坂本緑村と投句 古見豆人静岡県駿東郡小山町立成美高等小学校長に着任 古見豆人あゆみ吟社創設 部外湯山素歌・湯山逸素も同人 古見豆人の推薦で渡邊水巴主宰月刊俳誌『曲水』に投句

田園俳人松本椿年の生涯と作品（二）

昭和五年 (1930)	四月	四十三歳	『曲水』第十四卷第九号(昭和四年九月号)に初掲載 豆の芽をなめつくしけりなめくじり 餘花の家門扉音なく開きけり
昭和六年 (1931)	六月	四十三歳	『あゆみ句帖』刊行 小山町立成美尋常高等小学校、小山町立第一尋常高等小学校に改称 昭和天皇静岡行幸 天覧の飾玉を作る 行幸に就き天覧糸の飾玉を作る とすれば汗ばめる手を洗いつつ『新草俳句集二〇八頁
昭和七年 (1932)	十月	四十四歳	古見豆人大富士吟創設 俳誌『大富士』創刊同人 草案新築 飾矢の鬼門差しある銀河かな(『曲水』第十七卷第三号)
昭和八年 (1933)	十月	四十五歳	富士紡績小山工場退社
昭和九年 (1934)	九月	四十七歳	石田佛子あゆみ句会初参加
昭和十年 (1935)	一月	四十七歳	正月富士登山 雪中富士登山五句『曲水』第十八卷第四号の竿頭を飾る 吹雪く中に御慶かはわして消えにけり 末子喜美子小山第一尋常小学校に入学 木の芽 末子入学 広げたる本の句ひや子の芽晴れ (『大富士句帖第一輯』一七頁)
昭和十一年 (1936)	三月	四十八歳	この頃から『曲水』への投句休止 義父逝く三句 凍土に放り出したる飾りかな 松とりし穴に立てけり門位牌 霜に立てて折れし線香や笹子鳴く (『大富士第五卷第三号』(昭和十年三月号)三頁) 小山第一尋常高等小学校教員大島源悟郎君溺死(三句) 水底の子を呼ぶ母や雲の峰 夏の草句はしく焚火煙けり 暮れんずる水に火映える河鹿かな (『大富士第五卷第十号』(昭和十年十月号)四頁)
		四十八歳	次姉くら没(行年六十三歳)

昭和十二年 (1937)	十一月	五十歳	日中戦争の勃発により甥紋地招集 秋雨を擧手にはじきて征きにけり (『大富士第八卷第一号』昭和十三年一月号)
昭和十三年 (1938)	四月	五十歳	古見豆人大富士第一尋常高等小学校校長を退職し、湘南学園(高座郡藤澤町鶴沼)に異動 大富士吟社は自宅東京世田谷に転移 豆人先生送別句會 半こげしまま咲満ちし櫻かな (『大富士第八卷第六号』各地句座 駿河小山 豆人先生送別句會四月二日小山第一尋常高等小学校被服室)
昭和十四年 (1939)	一月	五十一歳	初孫光弘誕生(辰雄イマ長男) 孫の尿膝にぬくとし今朝の秋 秋の灯や己がおならに怖ゆる兒 (大富士第九卷第十二号昭和十四年十一月号) 豆人師駿河小山再訪
昭和十五年 (1940)	四月	五十二歳	甥紋地戦死 末子喜美子松本本家の養女とする 長女イマの配偶者杉山辰雄と養子縁組(松本家嗣子とする)
昭和十六年 (1941)	四月	五十三歳	甥紋地の遺骨と軍刀帰還 戦死せる甥の遺骨を迎えて(二句) 南風 南風や血曇り濃ゆき日本刀 抱く遺骨脈うてるかに南風をゆく (『大富士句帖 第四輯』『大富士第十卷第八号』)
昭和十七年 (1942)	二月	五十四歳	孫京子(辰雄イマ長女)誕生
昭和十八年 (1943)	十一月	五十六歳	次女サク婚姻
昭和十九年 (1944)	二月	五十六歳	『大富士第十二卷第四号』への投句を最後に投句休止 父八十六歳生前墓碑を建つ(二句) 冬風の入日ににじめり朱入文字 冬風や己が石碑にぬかつける 十二月のれんげ咲きけり霜の中
		五十六歳	孫奈美江(辰雄イマ次女)誕生
		五十六歳	義兄紋次郎没(行年八十六歳)
		五十六歳	孫光弘早世(行年六歳)

宮川充司

昭和二十年 (1945) 二月	五十七歳	三女志磨婚姻
昭和二十一年 (1946) 二月	五十八歳	次兄啓作没(行年六十一歳)
昭和二十二年 (1947) 四月	五十九歳	孫典彦(辰雄イマ次男) 誕生 四女みどり婚姻
昭和二十三年 (1948) 五月	六十歳	末子喜美子、山崎栄と婚姻(松本自家の嗣子とする)
昭和二十四年 (1949) 四月	六十一歳	『大富士』投句一時復帰(第十八巻第五号・十一号 第九巻第六号・十号) GHQによる大富士の検閲廃止 孫時男(辰雄イマ三男) 誕生
昭和二十六年 (1951) 十一月	六十四歳	五女愛子婚姻(石田仏子夫妻が仲人)
昭和二十九年 (1954) 二月	六十六歳	『大富士』第二十四巻第二号への投句再開 老後 まだ餅をつき得る力ありにけり 凶作の田面ともなし初日の出 足柄峠豆人句碑除幕式記念句会(五月二十三日) 富士からの薫風句碑の座を巡る
昭和三十年 (1955) 五月	六十七歳	妻すみ逝去 行年六十九歳 老衰 老妻没す 三句 うなづけど目はうつろなり南風に灯す 子の孫の泣くを制して南風に佇つ 師よりの悼句南風の線香つぎ足しぬ (『大富士』第二十五巻第七号 昭和三十年七月号)
昭和三十三年 (1958) 十一月	七十一歳	古見豆人師没(十一月二十二日花石路忌)
昭和三十九年 (1964) 一月	七十五歳	孫京子婚姻
昭和四十年 (1965) 四月	七十六歳	孫奈美江婚姻
昭和四十五年 (1970) 四月	八十一歳	『句集 老稚』出版

昭和四十八年 (1973) 四月	八十五歳	前田岳人没 行年八十七歳 岳人逝く五句 『第二句集 限界』 次に逝くは吾かも春の雲仰ぐ 花冷えの土かけて永遠の別れかな (『みづうみ』第四百二号昭和四十八年七月号)
昭和四十九年 (1974) 四月	八十六歳	石田仏子和光市に転居 五月十九日中島公民館で送別句会
昭和五十年 (1975) 十月	八十八歳	孫典彦婚姻
昭和五十六年 (1981) 六月	九十四歳	勝福寺にて岩田柴人・小野虹人の追悼句会(六月十日)
昭和五十七年 (1982) 四月	九十四歳	石田仏子没(行年七十四歳) 『第二句集 限界』出版
昭和六十年 (1985) 二月	九十八歳	『仏子句集 花筏』没後出版 行年百歳にて逝去 春風に乗つてゆかばや句の行脚 絶吟